【令和６年度】竹富島ゆがふ館学習会

# 自然学習歩道を歩く

・日　時：令和６年１０月２６日（土）

午前 10 時～午後 12 時 00 分

・主　催：西表石垣国立公園
竹富島ビジターセンター運営協議会

・解説員：阿佐伊 拓（NPO たきどぅん職員）

・順　路：

① 竹富島ゆがふ館
　≪バスで異動≫
② 国仲御嶽
③ 旧与那国家住宅
④ 東パイザーシ御嶽
⑤ 西塘御嶽
⑥ 東門屋（伝建修復中）
⑦ なごみの塔
⑧ 世持御嶽
⑨ 玻座間御嶽
⑩ 真知御嶽
⑪ 西のスンマシャー
⑫ 旧ビジターセンター跡地（終点）

# 竹富島の道

普段何気なく使っている「道」。竹富島では、道に対する敬意がいたるところにみられます。白砂の道を島民が主体となって維持したり、ほうきの目を入れる習慣があったりしますが、こうした考え方は、昔からその道を使って暮らしを営み、生きながらえてきた感謝の念があるからです。集落の道に白砂を撒く習慣は伝統で、本来ならば、海砂を採取するのは法律で禁じられていますが、琉球政府時代から竹富島の住民は行政に働きかけ、慣習として特別に認められています。

現在では、観光業が生業となり大勢の観光客が訪れるため、ホーシ道は舗装され、新たに集落を取り囲む環状線が敷設されましたが、道を大切にする精神は現在でも生き続けています。

舗装される前のカイジ道（2009 年撮影）

# 竹富島の御嶽

竹富島の御嶽は、全部で２８あります。御嶽は、神様となったご先祖や
そのご先祖が招いた神様や、願いを重ねて拝所となったところなどがあります。
今回の学習会では、いくつかの御嶽の前を通りますのでご紹介します。

① 国仲御嶽（フィナーオン）

『八重山嶋由来記』（1713）に掲載されている古い御嶽。八重山唯一の首里王府との関りがある御嶽で、首里より園比屋武の神をお招きしている。

② 東パイザーシ御嶽（アガリパイザーシオン）

シンミンガナシが最初に降り立って竹富島を造ったとの伝承に由来する御嶽。前浜玉仁神人が拝み始めとされる。鳥居も拝殿もなく、極めて原始的な姿をとどめる御嶽である。

③ 西塘御嶽（ニシトウオン）

島の偉人、西塘（にしとう）の墓所が御嶽となる。創建は不明だが、1833 年に拝所を掘っ立て小屋から貫屋に改築したとの記述がある。

④ 世持御嶽（ユームチオン）

世持神と火の神の 2 神が祀られている。創建は 1930 年。種子取祭奉納芸能の際は、竹富島の神々がお集まりになる御嶽。

⑤ 玻座間御嶽（ウーリャオン）

『八重山嶋由来記』（1713）に掲載されている古い御嶽。竹富島の氏神をまつる「六山」のひとつ。島で最も徳の高い神、根原金殿と屋久島から渡来した神を祀る。

⑥ 真知御嶽（マーチオン）

神霊高いマートゥフージャとフゾン神の兄妹を祀る御嶽。個人が管理する御嶽だが、島の多くの祭祀に参拝する御嶽でもある。

# 旧与那国家住宅（マイユヌンヤー）

竹富島の集落は、島の農村集落として 1987 年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。しかし、保存される家屋の殆どが個人宅であり、屋敷の間取りを詳しく説明できる家屋がありませんでした。こうしたなか、竹富島の伝統的な間取りを有し、かつ保存状態の良いマイユヌンヤー（前與那國屋・1913 年築）を修復して、竹富島の家屋を訪れる人々に紹介できるよう文化庁と竹富町が保存に取り組みます。総工費は 6,100 万円、30 ヶ月の期間をかけて解体修理工事を行いました。

竹富島の保存家屋の材木の殆どが西表島から伐採し、海を渡って運び、浜砂に数年埋めて材木に仕上げる大変な手間をかけています。そのため、修復にあたり、材質や年代、使用した工法など綿密な調査をしています。

なお、マイユヌンヤーは、2002 年に所有者から竹富公民館へ譲渡され、翌年に竹富公民館から竹富町へ再譲渡し、2003 年 11 月 25 日に「旧与那国家住宅」として竹富町有形文化財に指定されたのち、2009 年に国の重要文化財に指定されています。

# 竹富島の井戸

新里村遺跡（AD12～13 頃）で明らかなように、竹富島に渡来した先人たちは、海岸線の集落から徐々に内陸に移動し、島の中央部に集落を構成しました。その最大の要因は「水」の存在です。竹富島は、石垣島を構成する古生層（富崎層）の延長が島の東北部まで連なり、その古生層にサンゴが堆積して造られています。古生層と隆起サンゴの間に水が溜まり、その水を求めて人々は暮らし始めたのです。今回の学習会では、３カ所の井戸を通りますのでご紹介します。

①　キニンカー（ガイセンカー）
採　掘：1906 年　大　工：東集落住民　深　さ：不明
伝　承：日露戦争従軍者 4 名の帰還と戦勝を記念して造成
願い元：玻座間御嶽

②　アーラカー
採　掘：不明　大　工：不明　深　さ：不明
願い元：玻座間御嶽

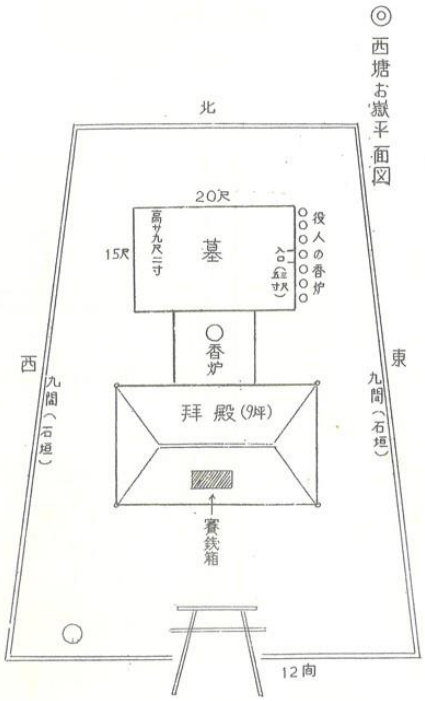
③　オーセカー
採　掘：1895 年　大　工：有田加那、外部落民補佐　深　さ：13 メートル
願い元：玻座間御嶽

# 西塘御嶽

竹富島最大の偉人である西塘は、テードゥンヒトゥ（竹富人）の精神性を育み、現在も島民の精神的支柱と言っても過言ではありません。

琉球王国の史書『球陽』によると、西塘はオヤケアカハチ戦争（1500 年）のさなか、竹富島に来島した首里王府軍の総大将である大里親方に非凡な才能を認められ、渡沖して琉球王直属の三司官の元に仕官します。石工として頭角を現した西塘は、園比屋武御嶽石門の建立（1519 年）、弁ヶ嶽石門の築造、首里城城壁工事にも携わったとされ、琉球王国最盛期の王、尚真王に認められ八重山の頭職（竹富大首里大屋子）として（1524 年頃？）竹富島に帰郷します。

八重山の統治者となった西塘は、カイジ浜に蔵元（行政府）を置き八重山を統治します。西塘は、蔵元に日時計や鍛冶屋を置き、首里の最先端の技術を八重山にもたらします。その後、蔵元を石垣島へ移し西塘は没しますが、西塘を慕う役人が、住居跡を墓所にして、西塘御嶽となりました。現在でも墓所の東側に役人が置いた香炉が残っています。



# 竹富島の自然環境

竹富島を訪れる人々は、「口々に美しい自然が身近にありますね」と仰ってくださいますが、実は、竹富島の自然は、御嶽の周辺と海岸線のみで、あとは人の手が加わった、人が管理すべき場所と言えます。

太平洋戦争（1941-1945）終結後、帰還兵や出稼ぎで島を離れていた島民が帰島し、竹富島には 2,000 人以上の人々が暮らしていました。終戦後の食糧難もあり、食糧増産のため島全体が畑と化していました。こうした暮らしの名残は、西表島から食糧を運ぶために拡張された西桟橋（1950 年）や、大勢の人々へ情報を共有するための放送台として建造されたなごみの塔（1953 年）などにみることができます。また、集落の至るところにみることが出来るイトバショウも同様に、バシャシン（芭蕉の着物）をつくるために植えた証です。

なお、現在では真っ先に駆除の対象となるギンネムは、薪の代用として台湾から持ち込まれています。

なごみの塔

## 世持御嶽

種子取祭の奉納芸能の舞台となる世持御嶽。旧暦 9 月から 10 月の巡りくる庚寅（かのえとら）・辛卯（かのとう）の二日間に、六山の神々が世持御嶽にお集まりになり、島民の芸能をご覧になります。ちなみに、昨年は 55 点の芸能を奉納しました。

世持御嶽の創建は古くはなく、1930 年（昭和 5）に創建されています。

この地は、琉球王国時代には番所が置かれており、琉球王が祀っていた「火の神」の祠がありましたが、琉球処分（1879 年）ののち 1908 年（明治 41）に番所に祠があるのはおかしいとの理由で、「火の神」は清明御嶽へと移されます。
つまり、種子取祭の奉納芸能は清明御嶽でも挙行されていたこともあります。

その後、清明御嶽に３神を祀るのはいかがなものかとの意見が大きくなり、1928 年（昭和 3）に「火の神」は竹富村役場の北側に移されたのち、現在の場所に据えられます。

世持御嶽は、種子取祭ばかりでなく、四月大願い、西塘ばんはじり、豊年祭、九月大願い、結願の祭祀で公民館役員、神司が参拝に訪れます。

# 西のスンマシャー

竹富島の集落は、風水思想に基づいて集落が造られています。琉球王国時代、各集落では、フンシミー（風水看）の指導に依って、島フンシ、村フンシ、屋フンシ、墓フンシの法を用いて吉凶を定めています。

トゥドイ道は、直線に通って集落の入口に石積みをして神木を植え、道を二路にスンマシャー（積場所）を築いています。

これは、悪魔やハナッキ（風邪）の祓いをする障害物で、島民の健康と繁栄の為に島フンシ法で造られた道路と村の入口を守るスンマシャーであると古老たちは伝えています。

悪風邪が流行するとスンマシャーに注連縄を張り神司が魔祓いを行いました。島では、道路の突き当りには魔よけの石ビッチュル（石敢當）を建て屋敷フンシ法に応じたものが現在も残されています。

MEMO